



城

第四十六回 安土城

—織田信長、最後の6年間—

深草 祐一

現代のみなさんが持っている、お城＝石垣＋天守閣というイメージ。そのような近世城郭の原型となったと言われるのが、織田信長の安土城です。それ以前にも、石垣を組んだ城や高い櫓を有する城はありましたが、安土城のインパクトは、それらとは一線を画するものでした。今回は、織田信長が本能寺の変に斃れるまでの最後の6年間を過ごした安土城をご紹介します。

当時の情勢

ながしの したら
長篠・設楽ヶ原の戦いで武田勝頼に大勝を収めた後、家督と岐阜城を息子の信忠のふただに譲った織田信長は、翌天正4年正月、琵琶湖の東岸にあった安土山あづちやまに城を築くことを決め、早くも2月末には安土へと居を移しました。これ以降は、武田勝頼への対応を徳川家康に任せる一方、石山本願寺をはじめとする畿内の反抗勢力の鎮圧戦を続けながら、柴田勝家を越前方面へ、羽柴秀吉を播磨方面へ、そして明智光秀を丹波方面へと派遣して、敵対勢力を平定していった時期になります。はじめ織田軍は苦戦しますが、反抗勢力をひとつずつ鎮圧し、天正8年には、ついに石山本願寺から門跡の顕如光佐が退去。北陸では加賀一向一揆を平定。そして、天正10年の春、衰退の見た武田に対し、諸方面から一斉に侵攻して、これを滅ぼしました。しかし、次に毛利との決戦に臨もうとした矢先の天正10年6月2日、本能寺の変が起こることになります。

壮麗なる安土城

あづちやま
安土山は、かつて近江守護六角氏が居城とした観音寺城かんのんじがあった峯に連なる標高200m足らずの小山で、当時は山の北側大半が琵琶湖に突き出すような地形になっていました。琵琶湖の水運を使えば、北の長浜、南の大津などを経て岐阜や京に容易に移動できたことから、尾張・美濃・近江を基盤としつつ畿内を平定していこうという当時の領国経営において非常に便利な立地だったのです。

平成元年から20年がかりで行われた発掘整備事業の結果明らかになった安土城の大きな特徴として、大手門から山の中腹まで石段が真っすぐに設けてあった点が挙げられます。その石段の両脇には階段状の敷地に重臣たちのものとみられる屋敷が立ち並んでいました。防御のために複雑な折れ曲がりをつけることの多い城郭において、このように真っすぐな大手道はこの後にも例がなく、人々に見せることを大きく重視した革新的な城であったと言われます。また、山上の本丸には、内裏の清涼殿と非常によく似た礎石配置の御殿が建っていたことも分かり、信長公記しんちょうこうきに天正10年正月に家臣たちに見学させたと記述される御幸の間みゆき（結局実現しなかった帝をお迎えするための部屋）があったのはここではないかと考えられています。そして、安土城には、本丸よりもさらに上段の郭に天主（安土城では天守と書かずに天主と書く）があり、信長はここで暮らしていたということです。いわゆる天守閣で暮らしていた戦国大名は後にも先にも織田信長だけだと言われます。当時の記録である「安土日記」によれば、天主は地下1階、地上6階の7層からなり、最上層は金で外側には欄干があり、その下の層は八角形をしていて外柱は朱塗りで内柱は金だったといい、各層の部屋には狩野永徳等に命じて描かせた様々な絵があって、それら全てに金箔が貼られていました。また、天主の中心部には地下の1層目から4層目までの吹き抜けがあり、仏教の宝塔が設置されていたという説があります。これは、独特な不等辺八角形の安土城天主台石垣とほぼ整合する「天守指図」と書かれた平面図が残されていたことに基づく説で、おそらく最も有名な天主再現案でしょう。ただ、上述の「安土日記」や宣教師ルイス・フロイスの「日本史」には吹き抜けに関する記述は一切無く、実際の天主の構造は、“諸説あり”としか言えないようです。

安土城での織田信長

さて、信長は安土城でどのような生活を送っていたの

でしょうか。^{しんちやうこうき}信長公記に記された信長の行動の一部をご紹介します。

信長が特に好んだのは鷹狩りで、ときには三河の方まで出掛けて行くこともあったようです。地方の大名からの贈り物として各種の鷹が贈られてくることもあり、信長がその中から気に入った鷹を選んでコレクションに加えていた様子も書かれています。ある時、京の東山で秘蔵の鷹が雪と風に煽られて飛んで行ってしまったことがあり、その鷹を見つけて遠く大和国から届けに来た者があったので、信長は非常に喜んで服や馬を与え、その者が室町幕府から領地を没収されて収入がないという話を聞いて、その旧領を回復してあげたこともあったということです。相撲も非常に好きだったようで、近隣の相撲取りや家臣達お抱えの相撲取りを安土城に招集して、たびたび相撲大会を開催しています。そして、みごとな相撲を何番もとった者には様々な褒美を下賜して褒め称え、特に優れた者は知行を与えて取り立てたりしました。また、ある時、信長が小姓衆5~6人を連れて琵琶湖北方の竹生島に参詣に出掛けたことがありました。水陸あわせて片道十五里もあるため、安土城の者は皆、今日は長浜城に宿泊されるだろうと思い、二の丸へ出掛けたり、近くの寺へ参詣に出掛けたりしていたところ、思いもかけず当日に帰城されたことから、大騒ぎとなりました。信長は、遊びほうけていた者は縛り上げて罰を与え、寺に行っていた者については庇^{かば}いだてした長老ごと成敗したといいます。このように、労を惜しまぬ者や賞賛すべき能力や働きがあった者には惜しみなく褒美を与える反面、与えた役目に対していい加減なことをする者、自分の命に従わない者には、情け容赦のない処罰を下していた様子うかがえます。

その他、領内での事件や争い事について詳しく話を聞き裁定を下すこともありました。例えば、山崎の町人の直訴が既に決着の付いた訴訟について文書を偽造してなされたものであることが確認されると、けしからぬとして成敗、つまり死刑にしたりしています。また、不思議な事を起こすということで人々から寄付を集めていた客僧を呼びつけ、この場で奇跡を起こして見せよと迫って何もできないことを確かめると、町中を晒しものにした上で追放としました。さらに、この客僧が不妊や病気の女に深夜に秘法を伝授すると言って「へそくらべ」なることを行っていたなどということが判明したため、諸国に触れを出して捕らえさせ、糾明の上で成敗しています。そして、このような怪しい者が城下に滞在していた理由を確かめ、寺の修理のための資金集めの勸進僧^{かんじんそう}として置いていたことが分かると、修理費として多額の銀子を与えたということです。こうした裁きの中で、特に有名な

のが、法華宗と浄土宗の宗論を裁定した事件です。安土城下にやって来て法談を行っていた浄土宗の僧に法華宗門徒の者が問答をしかけたことから、法華宗側も僧を呼んで二宗派で宗論を行うことになったと聞いた信長は、ことなく収めるのがよからうと部下に調停を命じました。しかし、優勢とみた法華宗の僧が承知しなかったので、審判を付けて論争させることにしたところ、法華宗側がついに答えられなくなり、浄土宗側の勝ちと判定されました。信長は、よく学問を修めた浄土宗の僧を称賛し、逆に法華宗側には、今後二度と他の宗派を非難するようなことはしないと誓紙^{せいし}を差し出させました。そして、事の発端となった問答をしかけた者を捕らえて首を切らせたということです。このように、信長は、人を騙したり、努力もせず人を非難したりする者を非常に嫌いました。信長は比叡山の焼き討ちなどから宗教を否定していたようなイメージを持たれがちですが、天主内部に釈迦十大弟子の絵を描かせたり、たびたび寺社に参詣したり補修を援助したりと、神仏を敬う行動が多く見られます。ただ、宗教家として本来なすべきことをいい加減にし、立場を利用して私腹を肥やそうとするような者を特に嫌悪したようで、普通はなかなか手を出せない寺社に対しても正論をもって詰め寄り、生臭坊主は首を切り、腐敗した寺は焼き払うといった苛烈な処分を下しています。

その後の安土城

本能寺の変の後、山崎の戦いで明智光秀が討たれるに至る混乱の中、安土城は焼失してしまいます。なぜ焼けてしまったのか、理由は分かっていません。そして、安土城は本格的に再建されることはありませんでした。現在、20年がかりの発掘整備事業のおかげで登城ルートが整備されており、天主台跡からは信長が見たであろう琵琶湖越しの比叡山の風景を望むことができます。また、JR線を挟んで少し離れたところには、安土城考古博物館があり、その隣には6~7層目を原寸で再現した安土城天主も展示されています。是非現地を訪れて、この特別な城をご覧ください。



天主台からの眺め(干拓のため現在は陸地だが、北側に見える安土山の山裾の周囲は当時全て湖だった)